

は し が き

本叢書は、文部省高等学校学習指導要領に準じて、日栄社が、多年の信用と経験とにより、高校生諸子の学習・受験の好伴侶として、新しい構想のもとに鋭意刊行した国語参考書の決定版である。本叢書の執筆刊行にあたっては、編著者らは、常に協議を重ね衆知を集め、諸説を吟味検討して注釈の完璧を期するとともに、あくまで良心的に、高校生諸子を対象として「わかりやすく」かつ「親切に」とつとめたつもりである。われわれはここに、大いなる自信をもって、諸子のもとにこの叢書をおくる。なお、われわれは、常に読者諸子の声を謙虚に聞きたいと念願している。

お気づきの点があれば、どしどしお聞かせ願いたい。

凡 例

「本文は最も広く用いられているものによったが、必ずしもこれにとらわれず、たとえば入試問題にとられたものなどは、なるべくそのままの形で載せることにした。そのため漢字の宛て方などは不統一になったが、これは入試問題そのものがいろいろな形で出題されるので、かえってその実際になれてもらっておくほうがよいと思っただからである。またできるだけ多く読みがなをつけて読みやすくするとともに、原文の左わきには、かたかなで読み方を示した。

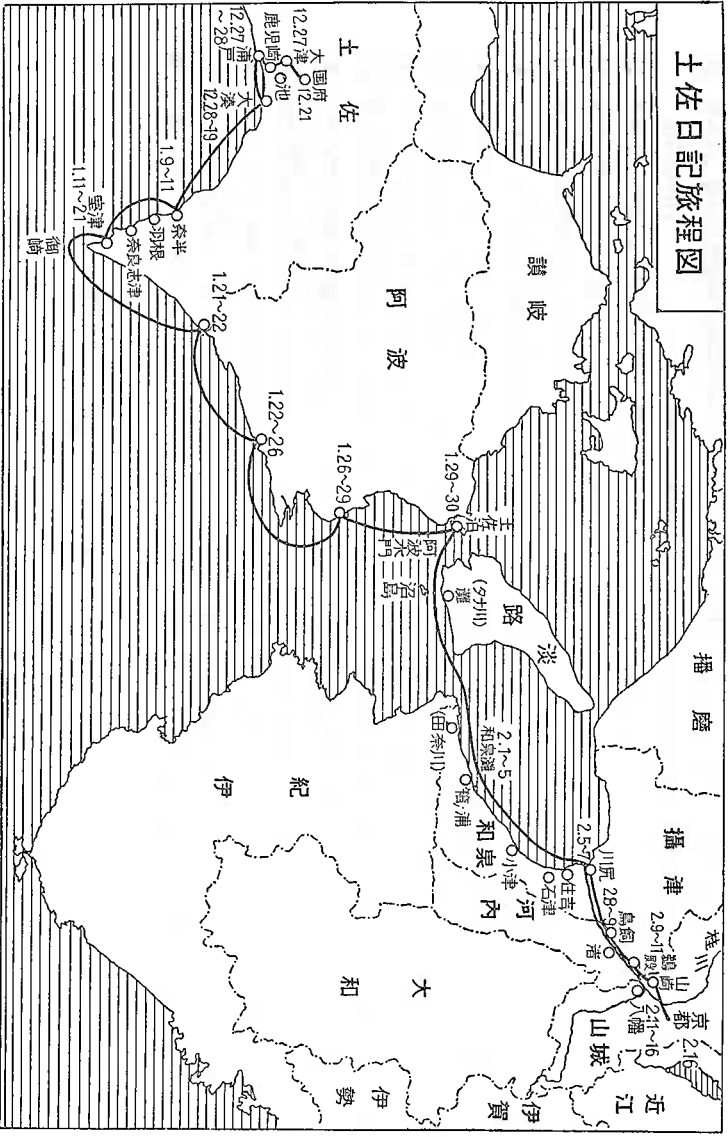
- 二 解説は、その章の内容を簡潔にまとめたものであるが、必要に応じて、解釈・鑑賞の手引きとなるようなことがらをも加えた。
- 三、口訳は原文に即してわかりやすい訳文を作ることにとめた。原文になく訳文に補った個所には（ ）をつけ、明示し、原文と訳文を比較対照するに便ならしめた。
- 四、読解の要点には原文を読み解くうえのヒント・手引きになるような語句・語法・文脈上の要点を解説した。古文の實力をつけるには、いきなり訳文を読むのではなく、できるだけ自分の力で考えてみるのがたいせつである。それゆえ、この「読解の要点」を手がかりとして實力を養成されんことを切望する。
- 五、語釈と文法は、平易なことはで、しかしできるだけ詳しく説くことを心がけた。抽出した語句には、必要があれば「」の欄内に品詞名を示して、次に語義を説いた。重要語や、一語で多くの意味を持つ語については、そのすべての意味・用法をあげて古文解釈の基礎知識が身につくよう心がけた。
- 六、文法の要点では、解釈上むずかしくはなくても、文法的に検討しておかなければならないような語句をとりあげて説明した。特に文法的な基礎事項はなるべくこの欄で扱い、十分な解説を加えることにした。
- 七、鑑賞の欄を、重要な章ごとに設け、文学作品としての味わいや、『土佐日記』の諸問題についての考察を行った。

八、右の五、六の説明にあたっては文法参照重要語参照等の指示をして、相互の関連をはかり、できるだけ学習上の便宜をはかるように意を用いた。

九、研究問題とその解答を、重要な章に添えた。問題は入試問題中から厳選するとともに、新作問題をも加えたが、これによって各日の實力をテストされた。

一〇、『土佐日記』の理解のためには、地図はきわめて大切であるので、三ページに旅程図を示すとともに、本文中に必要な応じて地図を挿入した。またさし絵もできる限り多くその個所に挿入した。

土佐日記旅程図



土佐日記 目次

解題	一	一男もすなる日記といふものを	二
一	二	二十二日に、和泉の国まで	二
二	三	二十五日、守の館より	三
三	四	二十七日、大津より浦戸をさして	四
四	五	かく別れがたくいひて	五
五	六	二十八日、浦戸より漕ぎ出でて大湊を追ふ	六
六	七	二日、なほ大湊にとまれり	七
七	八	七日になりぬ。おなじ湊にあり	八
八	九	かくて、このあひだに事多かり	九
九	一〇	ある人の子の童なる、ひそかにいふ	一〇
一〇	一一	八日、障ることありて	一一
一一	一二	九日のつとめて、大湊より奈半の泊りを	一二
一二	一三	追はむとて	一三
一三	一四	かくて、宇多の松原をゆきすべ	一四
一四	一五	かくあるを見つつ、漕ぎゆくまにまに	一五
一五	一六	十一日、あかつきに舟を出だして、室津を追ふ	一六
一六	一七	この羽根といふところ間ふ童のついでにぞ	一七
一七	一八	十三日のあかつきに、いささかに雨ふる	一八
一八	一九	十四日、あかつきより雨ふれば	一九
一九	二〇	十五日、今日あつきがゆ煮ず	二〇
二〇	二一	十六日、風波やまねば	二一
二一	二二	十七日、くもれる雲なくなりて	二二
二二	二三	十八日、なほおなじとこにあり	二三
二三	二四	この歌どもを、すこしよろしと聞きて	二四
二四	二五	二十日、昨日のやうなれば、舟出ださず	二五
二五	二六	かの国人、聞き知るまじく	二六
二六	二七	二十一日、卯の時ばかりに舟出だす	二七
二七	二八	かくうたふを聞きつつ漕ぎ来るに	二八
二八	二九	二十二日、夜んべの泊りより、こと泊りを	二九

追ひてゆく	三〇
二十六日、まごとなやあらむ、海賊追ふと	三〇
いふは	三一
このあひだに、風のよければ、楳取いたく誇りて	三二
二十七日、風吹き波荒ければ舟出ださず	三二
二十九日、舟出だしてゆく。うらうらと	三三
照りて、漕ぎゆく	三四
おもしろきところを舟をよせて	三五
三十日、雨風吹かず。海賊は夜ありきせむ	三五
なりと聞きて	三六
二月一日、朝のま雨ふる	三六
また、舟君のいはく、「この月までなりぬる	三七
こと。」	三七
二日、雨風やまず	三八
四日、楳取「今日風雲の気色はなほだあ	三九
し。」といひて	三九
五日、今日からくして和泉の灘より小津の	四〇
泊りを追ふ	四〇
「今日、波な立ちぞ。」と	四一
かくいひてながめつつ来るあひだに	四二
また、いふに従ひて、「いかがはせむ。」とて	四三
六日、浮標のもとより出でて、難波につきて	四四
七日、今日川尻に舟入り立ちて	四五
八日、なほ川上りになづみて、鳥飼の御牧	四六
といふほとりに泊る	四六
かくて舟ひき上るに、渚の院といふところ	四七
を見つつゆく	四七
かく上る人々の中に	四八
十一日、雨いささかに降りて、やみぬ	四八
十五日、今日車率て来たり	四九
十六日、今日のようなさつかた京へ上る	五〇
夜になして京には入らむと思へば	五一
夜ふけて来れば、ところどころも見えず	五二
さて、池めいてくほまり	五三
土佐日記旅程図	五四
和歌索引	五五
語句索引	五六

た不朽である。

第三には、作者の個性が作品の上に躍如としていて、時代を越えた普遍的な文学的価値をそなえていることである。「内容」の解説でもふれたように、土佐日記を通読すると、貫之の風貌・性格・態度などが、まのあたりに見るように感じられ、しかもその明るく諧謔的で、機知に富み、情にあつく、ことに亡児に対する切々たる思いなどは、読む人の心をひきつけて離さない。あの有名な「歌よみに与ふる書」(明治三十一年)で貫之を罵倒した正岡子規でさえも、この日記については「これだけに事情のよくあらはれてゐて面白きもの後世になきは如何にぞや」と激賞したほど、この日記の文学的価値は高く評価されているのである。

六、諸本・研究書 「土佐日記」の現存最古の写本は、前田家本(定家書写本ともいう)である。これは貫之自筆の本が蓮華王院(三十三間堂)の宝蔵に収められていたのを、たまたま定家が見て、感激の中にこれを書き写したものである(文暦二年(三三五)書写)。しかしその時定家はすでに七十四歳で視力も衰え、盲目に近いほどであったので、誤写はまぬかれなかつたであろう。その翌年定家の子為家もまたその貫之自筆本を書写した。この為家書写本は現存しないが、為家本の忠実な書写本として青籟書屋本があり、おそらくこれが最も原本に近い形をもつと考えられている。そのほか室町時代に入って、將軍義尚に伝えられた貫之自筆本を写した宗綱書写本系統のものや、東隆書写本系統のものなどがある。さて貫之自筆の原本は右のように足利將軍義尚まで伝来したが、その後姿を消して今日見ることが出来ないのは実に遺憾である。

「土佐日記」の注釈書は非常に多いが、左に諸子の参考になる主なものを挙げておく。

香川 景樹	土佐日記創見	三浦 圭三	新訳の土佐日記とその口訳	今泉 忠義	土佐日記精解
岸本由豆流	土佐日記考証	臼田基五郎	土佐日記の鑑賞	小西 基一	土佐日記評解
吉川 秀雄	校定土佐日記評釈	橘 純一	土佐日記	萩谷 朴	土佐日記新釈
永田 義直	土佐日記新講	塚本 哲三	通解土佐日記	中田 祝夫	土佐日記(新註国文学叢書)
小室 由三	土佐日記全釈	山田 孝雄	土佐日記	鈴木知太郎	土佐日記(日本古典文学大系)

一 男もすなる日記といふものを

【解説】 著者貫之は、まずわざと女をよそおい、男の漢文の日記にならって、和文の日記を書いてみようという旨を述べ、ついで承平四年十二月二十一日、関司の官命を出立する時の様子を書く。

男もすなる日記といふものを、女もして
みむとするなり。その年の十二月の二十
日あまり一日の日の戌の時に門出す。そ
のよし、いささかにもに書きつく。

ある人、(東の四年五年はてて、例のこと
どもみなしをへて、解由などとりて、住む
館より出でて舟にのるべきところへわた
る。かれこれ、知る知らぬ送りす。年ごろ
よく比べつる人々なむ、別れがたく思ひ
て、日しきりにとかくしつづ、ののしるう
ちに夜ふけぬ。

【研究】 男もすなる日記といふものを、女もしてみむとするなり。

【口訳】 男も書くという日記というものを、女(のわたし)も書いてみようと思つて書くのである。某年の十二月二十一日という日の午後八時ごろに家を出る。その有様を少しばかりもの書きつける。

ある人が、(関司としての)任国での四、五年の(任期)が終わって、おきまりの事務引継ぎをみんなすませて、解由状などを(新任の関司から)受け取つて、住んでいる官舎から出て、舟に乗ることになっている所へ向かう。あの入この人、知っている人知らない人(など多くの人)が見送りをする。この数年来親しくつきあつてきた人々は、とりわけ別れにくく思つて、昼中しきりにあれこれ世話をしいしい、大騒ぎするうちに夜がふけてしまった。

続二十一日の日記は、出立の日のあわただしさを叙して、簡潔明快、さすがに男性文学者の筆にふさわしい。

【解答】

A、土佐日記冒頭の文である。これまでも漢文で書かれた北朝的な公卿たちの日記はあったが、貫之が女性をよそおって、はじめてかな文の日記を書いたことになって、平安女流日記文学、ひいてはかな文学全般の隆盛をきずいた点に意義がある。

B、(文法上)

a 用言の終止形に接続・広間推定。
b 用言の連体形に接続・既定。

C、口訳参照。

二 二十二日に、和泉の国まで

【解説】 大津で舟出を待っている貴族たちの所に、藤原言実・八木康教・園分寺住職が送別にやってくる。その時の様子をこぼす酒落(しゃれ)や、自衛自衛の明い諧謔(かいぎやく)を飛ばして書いている。

二十二日に、和泉の国までとたひらかに願たつ。藤原言実、舟路なれど馬のはなむけす。上中下、酔ひすぎで、いとあやしく、潮海のほとりにてあざれあへり。

二十三日。八木康教といふ人あり。この人、国にかならずしもいひつかふ者にもあらざなり。これぞたはしきやうにて、馬のはなむけしたる。守がらにやあらむ、国

【口訳】 二十二日に、和泉の国までは無事なようにと心静かに神仏に願をかける。藤原言実が「たすねてきて」、舟旅のだけでも「馬のはなむけ」(送別の宴)をしてください。身分の高い者も低い者も皆酔い過ぎて、ひどくしどけないかっこうで、海のとおりで、ふざけ合っている。(海の植で魚肉はあざれない(酒酔)のものであるのに、大へんふしぎなことにあざれ合っている)。

二十三日。八木康教という人がある。この人は必ずしも、国司の役所で親しく召し使っている者でもないようだ。(それなのに)この人は、(わざわざやってきて)りっぱな作法で饗別をしてくれた。国司の人柄がよかつたせい

人の心のつねとして、今はとて見えざるを、心ある者は恥ぢずになむ来ける。これは、ものによりてほむるにしもあらず。

二十四日、講師、馬のはなむけしに出でませり。ありとある上下、童まで酔ひしれて、一文字をだに知らぬ者、其が足は十文字に踏みてぞあそぶ。

であろうか、一体この国の人の心の常として、(国司の任が終わって都に帰る時には、)もう「用はない」と思って送っても来ないようであるが、(康教のように)まごころのある者は、人のおもわくなどかまわずに来たことだ。これはよい贈り物をもたらしたことによってほめるのではない。二十四日。園分寺の住職が、饗別ににお出でになった。そこに居あわせた人々はみんな身分の高い者も低い者も、子供までが酔っぱらって、一という文字をさえ知らない無学者が、その足は十の字に踏んで、(いわゆる千鳥足で)遊び興じている。

【解説】 「馬のはなむけ」という語の下には、「酔ひすぎ」・「酔ひしれて」と酒宴の場が出ている。また康教が「馬のはなむけ」をした後には、「ものによりてほむるにしもあらず」と言っていることを思い合わせると、「馬のはなむけ」が何を意味するか見当がつこう。二十三日の項の文脈と、発想上の明い諧謔、二十三日、二十四日の項のことばの上のしやれに注意を要する。

【解説】 ○和泉の国までと一和泉の国(タ下二・終)(願をかける意で、ある条) ○あざれあへり「あざれあへり(ハ四・巳)りまでは無事であるようにと。和泉の国(完・終)「あざる」には①あざける。②(魚肉などが)腐る。一の両意がある。ここを折ったのは、ここまでが海路で、風浪・海賊の心配が多いが、和泉の国は内海に面して海上も穏やかで、中央に近くて治安も保たれていたからであろう。一月三十日の条に、「今は和泉の国に來ぬれば、海賊ものならず」とある。○たひらかに(形動・用)「心静かだ。○願正つ(願)(名)・立つ

(タ下二・終)(願をかける意で、ある条) ○あざれあへり「あざれあへり(ハ四・巳)りまでは無事であるようにと。和泉の国(完・終)「あざる」には①あざける。②(魚肉などが)腐る。一の両意がある。ここを折ったのは、ここまでが海路で、風浪・海賊の心配が多いが、和泉の国は内海に面して海上も穏やかで、中央に近くて治安も保たれていたからであろう。一月三十日の条に、「今は和泉の国に來ぬれば、海賊ものならず」とある。○たひらかに(形動・用)「心静かだ。○願正つ(願)(名)・立つ